

チョウの夢を追い続ける人生

福田 晴男

1. 私とチョウとの出会い (Fig. 1)

人はこの世に生まれて此の方、何かしらにかわりをもちながら生きている。日本蝶類科学学会に所属する会員も、人それぞれではあるが、人生のどこかでチョウやチョウ友と出会い、様々な形で今日までチョウの夢を追い続けてきていると拝察している。そこで、会員の一人としての私が、どのような変遷を経て幼少年時代から今日までチョウの夢を追い続けてきたかをバタフライ・サイエンス最終号に記させていただくことも、一人の事例として、それなりに意味があるのではないかと考えた。少し長めではあるが、私のチョウの夢追い人生を順序だてて披露したい。

まず初めに、唐突ではあるが、私の生後1ヶ月の孫がフタスジチョウを観ている写真から載せる。孫の視線は明らかにフタスジチョウに向いている。人生の始まりにフタスジチョウを観た？(本人の記憶には残らないが記録には残る)人間は、私の孫が日本・世界初であろう。親バカならぬ爺バカ丸出しである。しかし、私も生後1ヶ月の孫のようなレアなケースではないが、幼少の頃、チョウとそれなりにレアな出会いをしている。

昭和24年(1949年)1月14日生まれの私は、幼少の頃、仏事で郷里の鳥根県庄摩郡温泉津町湯里(現在の大田市温泉津町湯里)に帰ることが多かった。そのとき、誰かに踏み潰されたと思われる馬鹿でかい(幼児の私には30cmくらいの大きさに観えた)開翅状態のカラスアゲハをまじま



Fig. 1. 私とチョウとの出会い

1. 孫の晴太郎^{はるとろう}に羽化したフタスジチョウを観せる私 生後1ヶ月 2023年3月16日
2. カラスアゲハやイチモンジセセリを観た頃の私 4歳10ヶ月 富岡八幡宮にて 1953年11月15日

じと観た記憶が残っている。その妖艶な深緑色の印象は鮮烈で、何かお弔いに関係するかのような姿形に観えた。これが人生初のチョウとの出会いである。幼い頃の記憶、その二、父親の会社の寮が東京都江東区深川永代2丁目(永代橋付近)にあり、寮の裏庭の前に隅田川の支流(運河)が流れていた。なぜか私は、寮の下水が隅田川の支流に流れ出る粘土でできた赤茶色の丸い土管を眺めていた。土管の出口から、白い米の粒々が出ていて、隅田川の支流の砂

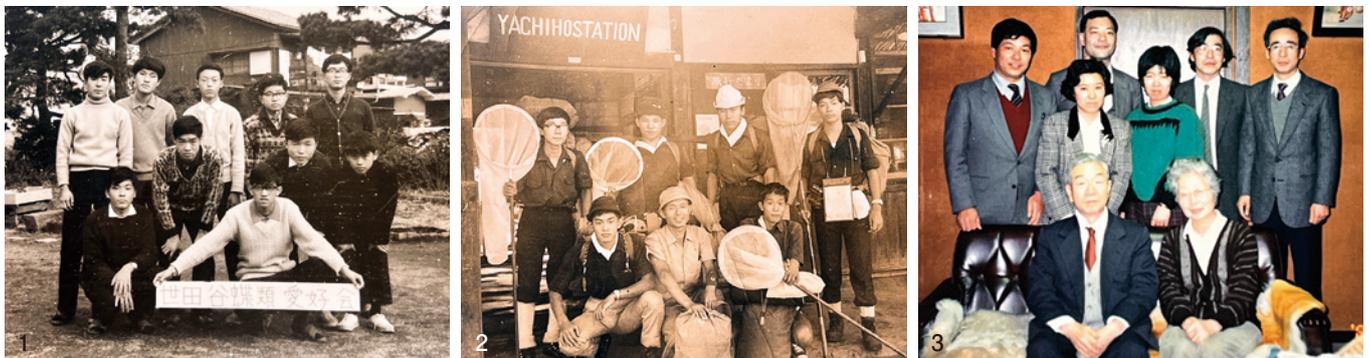


Fig. 2. 私とチョウ友との出会い

1. U君こと内村文夫君の影響で私のチョウの夢追い人生が中学2年に始まった 後列左がU君 前列左が私 1965年12月5日
2. 八ヶ岳池の平牧場で生物部の合宿 右端が高校2年の私 左端は長田勝氏 小海線八千穂駅にて 1966年8月28日
3. 岡田先生ご夫妻と玉川大学昆虫学研究室同期の人たち 左下が岡田一次博士 左上が私 岡田先生宅にて 1988年3月12日

地にこぼれ落ちていた。そこにイチモンジセセリが飛来していた。今にして思えば、隅田川の支流の川縁は澄んでいた。白くて丸い米粒とイチモンジセセリの黄土色の翅がセットになって強烈な記憶として残っている。このカラスアゲハとイチモンジセセリは、夢追い前の無垢の時代、私が5歳までに会ったチョウたちである。

2. 私とチョウ友との出会い (Fig. 2)

小学2年生の春に江東区深川から世田谷区上北沢に引っ越した。世田谷で初めて木で鳴く虫を知り、セミ採りに夢中になった。小学校時代の夏は、毎日桜並木や近所の森でセミ採りをしていた。虫かごの中にアブラゼミを沢山入れてジージー鳴かせながら八百屋のおばさんの前を通ると「晴男ちゃん、そんなにセミを採ってどうするの、てんぶらにでもするの?」と優しい声をかけられたことを思い出す。近所の皆が顔見知りの昭和時代であった。

中学1年になると、私は林間学校で白樺湖に行った。そこにギーと鳴く翅の透き通ったセミがいて驚いた。木を揺ると落ちて来るセミで、調べるとコエゾゼミと分かった。このとき、私にとって人生を変えるほどの大きなできごとが起こった。同級生のU君が立派な網を持ってチョウ採集をしていたのである。U君が黄色いチョウを採集したので、「何ていうチョウですか」と聞いたら「スジボソヤマキチョウ」と即座に答えてくれた。私はその場で弟子にしてもらい、手帳の切れ端で三角紙を作って手渡した。U君は夏休みの宿題でチョウの標本を理科室に飾った。理科の先生がU君の標本を褒めていた。そのことがきっかけで、同じ中学校のU君と私を含めた2年生4名と1年生2名の計6名で「世田谷蝶類愛好会」を創った。後の「世田谷昆虫愛好会」である。地域の私立保育園が私たちの会合の場所だった。当時は、未成年の私たちに部屋を貸してくれるほど大らかな時代だった。園庭で「世田谷蝶類愛好会」と大きく紙に書いた横断幕をもって撮った集合写真が懐かしい。この頃、私の知らない場所で京浜昆虫同好会が盛んに活動していた時代である。私のチョウの夢追い人生は、U君の影響で中学2年に始まった。

高校では生物部の部長になり、階段教室にススキ原のようなジオラマを造って女子高校生をキャーキャーいわせて楽しんだ。水道の蛇口から出る水の音を録音し、カセットテープで川のせせらぎに見立てて流した。生物部の顧問の先生は、私たちの部活動を暖かく見守ってくださった。生物部の合宿で北八ヶ岳の八千穂高原に行き、ヤマキチョウ

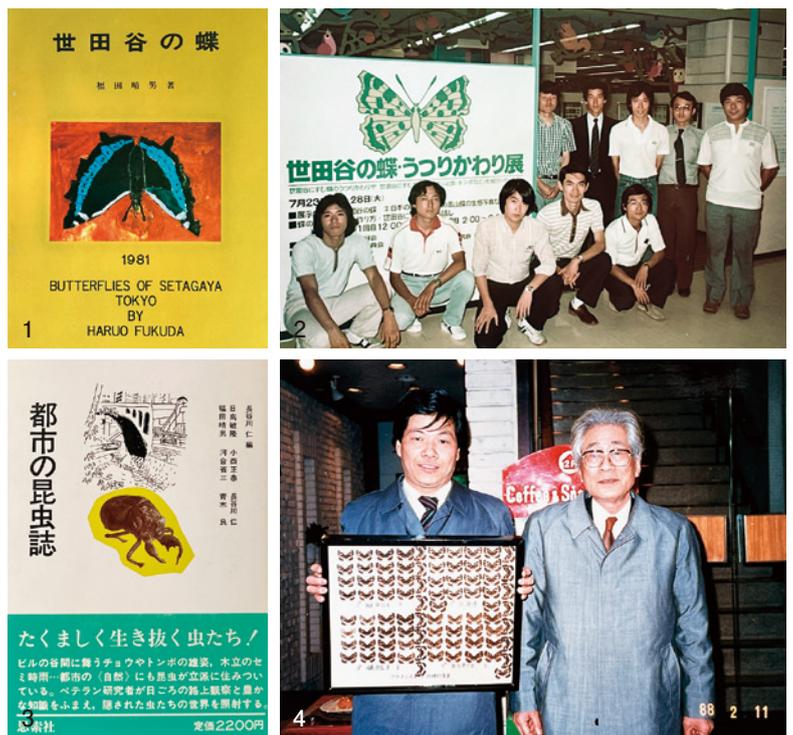


Fig. 3. 世田谷の蝶とチョウ展覧会

1. 1981年に自費出版した「世田谷の蝶」 チョウの夢追い人生の一里塚になった
2. 世田谷の蝶・うつり変わり展 世田谷昆虫愛好会が主催した二子玉川のデパートにて 右端が私 右下が美ノ谷憲久氏 1981年7月23日
3. 都市化をオリンピックショックと名付けた「世田谷の蝶」補遺版 1988年刊
4. 「世田谷の蝶」を褒めてくださった白水隆博士(右)とフタスジチョウ標本を手を持つ私(左) フタスジチョウ大論文の完成に向けて励ましの言葉をいただいた 東京渋谷にて 1988年2月11日

を沢山採ったことも思い出に残っている。大学は親や親戚の反対を押し切って法科商科ではなく昆虫学を学べる農学部を選んだ。

北海道帝国大学の松村松年博士の最後の弟子に当たる岡田一次博士のおられる玉川大学に入り、昆虫学を専攻した。私はミツバチを研究せず、岡田先生の粋な計らいを受け、国立予防衛生研究所の安富和男博士の指導のもと衛生害虫の研究を行なった。卒業論文のテーマは、蜂場に飛来する昼間活動性蚊の生態である。蜂場で蚊に刺されながら2年間研究を行なった。ヒトスジシマカを中心とした卒業論文を書き、同時に中学・高校の理科教員免許を取得して卒業した。岡田一次先生に「福田君の論文は調べた内容が少ないのに考察が多過ぎる」と指導を受けたことが心に残っている。今考えると、大学の規制や法律も緩やかで、農学部なのに医動物学の卒論、農学部なのに中・高の理科の免許が取れる時代だった。

卒業後、中学校の理科で採用されたが、小学校に配属された。小学校教員が不足していたのである。無免許で小学



Fig. 4. フタスジチョウとの出会い

1. 風穴でフタスジチョウのマーキングをしている美ノ谷氏（左）と私（右） 福島県南会津にて 1985年7月7日
2. 風穴で発見したフタスジチョウの科学ドキュメント 表紙は風穴のオオタカネバラとフタスジチョウ 1986年発行
3. 風穴のフタスジチョウを調査するネプティス研究会の4名 左から美ノ谷憲久氏 木村正明氏 岩野秀俊氏 私 福島県南会津にて 1986年6月29日

校教員に採用された。無免許のため担任の仕事をしなが
ら、通信教育で小学校免許を取得した。以来38年間(24年担任、
8年教頭・6年校長)小学校勤務となった。その後は教育
委員会で5年、私立の女子小学校で理科講師を8年勤めて
71歳で退職し現在に至っている。今でも新宿区立の小学
校で3年生にチョウ(昆虫)の授業を6月と9月に6校ぐ
らい教えに行っている。

3. 世田谷の蝶とチョウ展覧会 (Fig. 3)

私は1977年から4年かけて世田谷のチョウを調べ、
1981年2月に「世田谷の蝶」を自費出版した。九州大学
の白水隆博士から、地元のチョウ相の変遷を詳細に調べた
研究は日本で最初ではないかとお褒めの言葉をいただいた。
この後、日本各地で「○○のチョウ」が出されるよう
になった。「世田谷の蝶」は、地域の蝶相をまとめるお手本、
バイブル本となった。この本を引っ提げて、大手のデパート
で1981年7月に「世田谷の蝶・うつり変わり展」を行な
った。主催は世田谷昆虫愛好会(略称世田昆)である。この
頃の仲間を介して私のチョウ友は、ぐんと増えた。当時の
「世田昆」から、チョウの世界で著名になる人たちが数多
く輩出された。この展覧会は6回続き、「北海道の昆虫と
北の仲間たち展」では北海道鱗翅目同好会長の館山一郎先
生を講師にお迎えし、ご講演していただいたことが思い出
に残っている。思い返せば中学時代から世田谷のチョウを
調査記録し、戦前の記録も加えて9科85種の記録として
まとめた「世田谷の蝶」を出したことが、私のチョウの夢
を追い続ける人生の記念すべき一里塚となった。

なお、展覧会の後、再び「世田谷の蝶」を引っ提げて、
人生初の日本鱗翅学会発表を32歳のとき、1981年11月
22日に東京医科歯科大学特別講堂で行なった。演題は「都
市化と蝶相の変遷—東京平地・世田谷区の場合—」である。

その後、1988年に長谷川仁編の「都市の昆虫誌」が出さ
れた。私は6人の共著者の一人として、移りゆく東京のチョ
ウ—世田谷からみて、を執筆し、「世田谷の蝶」その後の
記録を補遺として付け加えた。この本で、世田谷のチョウ
の種数や個体数が急激に減った理由を都市化だと考え、「オ
リンピックショック」と名付けた。

4. フタスジチョウとの出会い (Fig. 4)

「世田谷の蝶」を出した後、今度は一つのチョウに絞っ
て研究がしたくなった。「世田谷の蝶」の文献でお世話に
なったむし社の猪又敏男氏に相談したら、岩手県宮古市の
三浦秀明氏がフタスジチョウの幼虫採集法に詳しいから教
えて貰えばいいと勧められた。私の妻の実家が宮古市であ
ることが幸いし、私は三浦氏にフタスジチョウの幼虫採集
法を教わり、フタスジチョウの研究に嵌っていった。フタ
スジチョウの幼虫は人家のユキヤナギで採れるので、分布
調査が面白い。ユキヤナギで幼虫が採れれば、近くに本来
の生息地がある。分かり易いセオリーである。しかも調査
は一年中できる。飼育羽化した成虫の斑紋には地理的変異
がある。私にとって願ったり叶ったりのチョウとなった。
この頃、世田昆に入会した美ノ谷憲久氏がフタスジチョウ
研究に加わった。私にとって最良のチョウ友ができた。
1983年(昭和58年)以後、美ノ谷氏と二人三脚で北海道、
岩手、奥只見、南会津、奥日光、谷川岳、至仏山、浅間山、
八ヶ岳、富士山、南アルプス、北アルプス、御嶽山など日
本中のフタスジチョウについて分布調査(幼虫採集)を行
なった。その結果、成虫斑紋の地理的変異や生態について
様々なことが分かってきた。中でも一番の思い出は、美ノ
谷氏によって発見された福島県南会津のフタスジチョウで
ある。生息地は地面から冷風の出る風穴地という特殊環境
であった。この風穴で発見されたフタスジチョウにまつわ



Fig. 5. ホシミスジとの出会い

1. 新川勉氏に韓国フタスジチョウ調査をお願いした 京畿道楊平（ヤンピョン）駅にて 左から美ノ谷氏 私 新川氏 1987年5月3日
2. やや暗い環境のエゾニュードで蜜を吸うウラグロホシミスジ 韓国江原道にて 2008年7月28日
3. 明るい環境のホザキナナカマドで蜜を吸うコウライホシミスジ 韓国江原道にて 2008年7月28日
4. ウラグロホシミスジとコウライホシミスジの生態を解明して喜ぶ美ノ谷氏（右）と私（左） 韓国江原道にて 2008年7月28日
5. 私の「日本と周辺域のホシミスジの種分化と生物地理」の発表後、新川勉氏にDNA分析の観点からの考えを述べていただいた 大阪府立大学にて 新川氏（左）と私（右） 2012年11月10日
6. 「日本と世界のホシミスジ」2017年刊 ホシミスジへの関心が高まり完売した
7. バタフライズ・フォーラムで日本や世界のホシミスジの種や亜種について話をする私 東工大イアルブルーホールにて 2017年12月18日
8. 高橋真弓氏（前列左から5人目）や中谷貴壽氏（前列右から4人目）をご招待し、むし社編集部や多くの教え子・保護者に囲まれてホシミスジ図鑑出版記念パーティーが開かれた 平澤和夫氏（上段右）が仕切ってくれた 前列左から3人目が私、4人目が美ノ谷氏 新宿モンゴル料理店にて 2017年11月25日

る科学ドキュメントは、1986年6月に発行された「見つけた！まぼろしのチョウ」に詳しい。

5. ホシミスジとの出会い (Fig. 5)

フタスジチョウの幼虫を採集していると、ホシミスジの幼虫と一緒に採集される場合が多い。自ずとホシミスジの標本も増えていく。そのうちドイツ型標本箱の数がフタスジチョウよりも多くなっていった。「世田谷の蝶」を出したころ、私はベニヒカゲを研究している木暮翠氏が主宰するタカオゼミナールに入会した。ときを同じくして美ノ谷氏も入会した。そのゼミで新川勉氏と出会った。新川氏に韓国のフタスジチョウ調査をお願いしたら、快く引き受けてくださった。調査の結果、韓国のフタスジチョウは成虫だけでなく幼虫の模様も日本のものとは違うことが分かった。この研究成果は、この後のフタスジチョウ図鑑につな

がっていく。

韓国調査の後、新川氏はDNA分析を始めた。新川氏は、私たち（福田・美ノ谷）のフタスジチョウとホシミスジ研究にもDNA分析の面から全面協力してくださった。調べた結果、フタスジチョウは日本、韓国、中国でミトコンドリア遺伝子がほとんど同じになった。しかし、ホシミスジはミトコンドリア遺伝子が日本国内も含め、台湾、中国、ロシアで差が出るということが判明した。その段階で、私と美ノ谷氏はフタスジチョウよりもホシミスジの方に興味関心が移行していった。1980年代後半から2016年までは、ホシミスジの研究にのめり込んだ。日本では本州、四国、九州を限なく調査した。海外では、台湾、韓国、中国、ロシアにまで調査の手を広げた。ホシミスジの成虫斑紋は日本の中でも地理的変異が多く、海外においても変異が大きかった。成虫斑紋分析、種や亜種記載、私のホシミスジ学（ホ



Fig. 6. チョウ好き育成 私立女子小学校での実践

1. 「全員展翅授業」で1948年に高尾山で採集したギフチョウの話をする松田邦雄先生 チョウ好き育成で私の最後の引き継ぎ授業になった東京女学館小学校 2013年10月23日
2. 「移動昆虫博物館授業」を行ない「全員展翅授業」への意欲付けを図った平澤和夫先生（左）と私（右）東京女学館小学校 2017年9月25日
3. 「全員展翅授業」は日本初、世界も？初であろう自分が採集したチョウで展翅をしたいと思う子どもが半数以上出た 2013年10月23日
4. 「全員展翅授業」補助の先生に展翅を教わる子ども 1匹展翅を覚えると2匹目三匹目と意欲を増し上手くなる 東京女学館小学校 2016年10月13日
5. 3年生で「全員展翅授業」を行なうと、こんなに多くの4年生が母親・父親とチョウ採集に参加する大人になってもチョウ好きであってほしい 八王子の公園にて 2014年5月11日
6. ギフチョウがカタクリの蜜を理科室で吸っている こんな授業は観たことがない この子はギフチョウ採集に行くようになった 2015年4月14日
7. 3年生の4月に展翅を教えてほしいと理科準部室にきたのですぐ教えた チョウ好きになり5年生の夏、富士山でキベリタテハを採集した 私の最後の教え子 2021年8月25日
8. チョウ好きになったことを日本鱗翅学会関東支部秋のつどいで発表する4年生 モンベルクラブ渋谷店5階サロン 2014年10月18日
9. チョウ（昆虫）好きを育成するにはどうしたら良いかの実践記録を私の責任編集で出したら好評で完売になった 2016年刊

シミズジを通して学んだことを書いた物語）は福田が担当し、ゲニタリア分析と地生態・自然史は美ノ谷氏が担当した。また、DNA分析は新川氏が協力された。その結果、世界のホシミスジは7種に分けられた。日本のホシミスジは11亜種に整理された。これらの内容の他に、チョウを

通しての教育活動も取り入れて「日本と世界のホシミスジ」という図鑑を2017年3月にむし社から刊行した。日本のホシミスジの各亜種に関しては問題提起の部分が多く、興味をもった研究者が引き継いでくれれば良いと思った。このホシミスジ図鑑の影響もあってか、本誌パラフライ・サ



Fig. 7. 妹と作った子ども用チョウ図鑑

1. 子ども用チョウ図鑑の出版につなげてくれた
妹の童話作家かとうけいこ氏（右）と私（左） 東京女学館小学校理科室にて
2014年10月20日
2. 未交尾のモンキチョウ♀に卵を産ませふ化しないことを証明した写真 福田・か
とう（2020）より
3. チョウの口吻は花の咲く植物が地球に出現する前からあったことを暗示する写真
福田・かとう（2020）より
4. 次世代にチョウの夢をつなぐ大図鑑4巻シリーズを福田晴男監修著・かとうけい
こ著で2020年～2021年に国土社から出版 2021年に児童ペン賞特別賞を授賞
チョウ観察会のあと石神井図書館にて 2022年6月5日

イエンスを含めてホシミスジの論文が世にポツポツと出されるようになった。ホシミスジの地理的変異や生態に興味をもつチョウ屋が増えてきた。初め売れ残るといわれていたホシミスジ図鑑は完売した。発刊当初に2刷本が60部出されたことを知る人は少ないであろう。

6. チョウ好き育成 私立女子小学校での実践 (Fig. 6)

私の夢は、フタスジチョウやホシミスジの分布成因を調べることで、子どもたちにチョウ（昆虫）好きを増やすことの2つである。現職教員時代は、チョウ好きを増やしたかったが、子どもがチョウ好きになるきっかけだけは作れたが、仕事が忙しくて、その後のチョウ好き支援活動ができなかった。なので、チョウ好き支援活動をしたいという思いはもち続けていた。その夢が定年退職後に叶うこととなった。それは、東京都の小学校長を退職し、高尾自然科学博物館に勤務し、夢追蝶（日本産蝶類生態写真255種撮影）を出され、グループ多摩虫の代表になられた松田邦雄先生に、私が教頭時代に博物館の講師を頼まれたことがきっかけである。その後、高齢になられた松田先生から私

立の女子小学校理科講師を引き継いでほしい、と懇願された。私は喜んで女子小学校勤務（最初の2年は教育委員会と掛け持ち）を引き受けた。

松田先生からチョウ好き育成を引き継いだ。せっかくの女子小学校勤務だから、チョウ好き好きになる手立てをバージョンアップしたいと思った。そのバージョンアップに貢献したのが、世田谷蝶類愛好会の初期時代、私が高校1年のとき中学2年で入会した平澤和夫君である。私の影響を受け、平澤君は小学校教員になった。最後は私よりも長い期間、校長となり、退職後は私と台湾・中国のホシミスジ調査にも同行してくれた。その平澤氏が「福さんが3年生の理科をやるなら、全員にチョウの標本づくりをさせればいい」とアイデアを投げかけてくれた。この標本作りの企てがバージョンアップにつながった。私と平澤氏で「全員展翅授業」という日本はおろか世界でも例を見ない？授業を編み出した。7年間で延べ500人以上が「全員展翅授業」を受けた。チョウの胸に針を刺すのを怖がった3年生が、展翅を覚えると、多くがチョウ好きになり、学年の半数以上が4年生でチョウ採集に参加した。同行する母親にもチョウ好きが増えた。私の夢である

チョウ好き支援活動が叶えられた。いや十分に叶えられた。この実践に間違いはなかった。この「全員展翅授業」の詳細は、日本鱗翅学会2014年発行のやどりが242号に「全員展翅授業に夢を載せて～小学3年生78名が初めてチョウの展翅を体験する～」に詳しい。日本鱗翅学会関東支部のつどいでは、私立の女子小学校の子どもたちが何回も発表した。母親の発表もあった。500名以上のうち、数名は高校生や大学生になってもチョウ好きが続いているし、母親・父親の一部もチョウ好きが続いている。2016年には別冊「昆虫と自然」で「昆虫好きを育てるために」の責任編集を担当した。女子小学校の実践をもとに多くの他者の実践事例も入れて11月に出版した。好評で、発売後、完売となった。

7. 妹と作った子ども用チョウ図鑑 (Fig. 7)

私には妹が二人いる。下の妹が幼少の頃、私が中学時代に多摩丘陵で採集したオオムラサキの標本を壊した。床においてあった標本箱の上に足ごと妹が乗ったためだ。ガラスは破損しオオムラサキはメチャメチャになったが、妹の



Fig. 8. 再びフタスジチョウとの出会い

1. フタスジチョウの図鑑用に整理された標本の一部
2. 線対称のように幼虫の巣殻に擬態するフタスジチョウ5 齢幼虫（食餌植物はアイズシモツケ） 山梨県日川溪谷 2021年5月16日
3. ホザキシモツケの吸蜜を終えて飛び立つフタスジチョウ 栃木県戦場ヶ原赤沼 2021年7月28日
4. 中国山岳地帯の2系統を含むユーラシア全体のフタスジチョウについて成虫斑紋・ゲニタリア・分子系統から研究した
共同研究者 左から私 中谷貴壽氏 宇佐美真一先生 美ノ谷憲久氏 西尾信哉氏 信州大学医学部にて 2024年7月25日

足は無事だった。私は悔しかったが妹を咎めなかった。私は定年退職後、私立の女子小学校の3年理科講師を8年勤めた。そこで指導した経験を生かし、チョウ好きに成長した女の子がスペシャリストになるドキュメンタリー風の本を出したいと考えた。いくつかの出版社に声をかけたが丁寧に断られた。そこで童話作家になった妹に相談を持ち掛けた。妹は幼少時の標本破損の借りを返したいと思った。妹にとって千載一遇の機会が訪れた。この機会を生かし、妹は兄の本づくりに全面協力してくれた。妹が懇意にしている若手編集者に話をもち掛けた。すると、「子どもが興味関心をもつチョウの図鑑を作る方が、将来のスペシャリ

ストが育ちますよ。ドキュメンタリー本より図鑑の方がいいですね」と進言された。私はチョウの幼虫や成虫の写真の入ったパソコンを携えて妹とK出版社に出向き、写真を見せながらチョウの不思議や面白さをここんと説明した。この私の熱のこもった話には若手編集者は耳を傾け、質疑応答が繰り返された。これは子どもにとって価値のある図鑑ができそうだと理解された。その場で「図鑑を出しましょう」と若手編集者からGOサインが出された。子ども用（小・中学生）のチョウ図鑑作りが始まった。ホシミスジ図鑑を出し終えてホッとする間もなかった。進行した図鑑原稿と写真説明をK出版社の編集部に持ち込んで熱弁



Fig. 9. チョウの夢追い人生を続ける

1. 国立オリンピック記念青少年センターで日本鱗翅学会第68回東京大会が行なわれた 私は関東支部幹事の皆様と協力し合い大会長としての役目を果たすことができた 左から中川忠則氏 私 美ノ谷憲久氏 田村昭夫氏 2022年10月30日
2. 日本蝶類科学学会の最初から最後まででの10年間に運営委員長として務められた朝日純一氏(左)と日本鱗翅学会関東支部長を9年間務めた私(右)は、ほぼ同時期に退任することとなった 朝日氏は春のつどいで終活図鑑の特別講演を行なった 関東支部春のつどい集合写真より 東大理学部講堂にて 2024年3月9日
3. 研究発表会でご講演をいただいた養老孟司先生(右)と3種になったホシミスジの標本を手にもつ私(左) 八王子市立由井第三小学校 校長室にて 2009年1月28日
4. フタスジチョウの図鑑を出した後、私の身体から何が出てくるのだろうか チョウの夢追い人生は続く アルメニアにて 2022年6月22日 中川忠則氏撮影

を奮ううちに、編集者から「福田さん、チョウのそだち方だけでなく、日本のチョウや世界のチョウの図鑑も福田ワールドで出しましょう」といわれた。編集者の熱意がひしひしと伝わってきた。余りに日本のチョウの種数が多いので、日本のチョウは2分冊になった。誠に光栄なことである。おかげで2018年から3年間、子ども用チョウ図鑑の作成で日々が明け暮れた。コロナ禍の3年間とかぶったため、デスクワーク(女子小学校を退職したから在宅勤務とはいわない)に集中でき、急ピッチで仕上げることができた。作成途中は妹と写真や説明文のやりとりを何度も行ない、妹は私の思いを編集者につないでくれた。図鑑のコンセプトは、子どもや保護者、先生の疑問に答える内容にする、夢の広がる内容にする、である。例を挙げれば、交尾しなくても卵は産むか?産んだとしたら、ふ化するか?では、産卵された卵が凹むふ化しない写真を載せる、チョウの口吻は花の咲く植物が地球に出現する前から存在して

いたのか?では、そのことを暗示する写真を載せる、チョウの標本写真はすべて原寸大にする、などなどである。編集者の熱意、妹の熱意に引張られて4巻の子ども用チョウ図鑑が完成した。「チョウのそだち方—飼育 観察 採集 展翅—」「日本のチョウ大図鑑① アゲハチョウ シロチョウ シジミチョウ」「日本のチョウ大図鑑② タテハチョウ セセリチョウ」「世界のチョウ大図鑑」である。これらの図鑑は、児童図書専門の国土社から、2020年5月から2021年3月にかけて福田晴男・かとうけいこの共著で発刊された。この4巻はセットとなり、「チョウまるごと大図鑑」という箱入りもできた。もちろん、4巻のバラ売りもある。ネット販売が順調で、今や日本全国の図書館や学校で人気の図鑑となっている。

8. 再びフタスジチョウとの出会い (Fig. 8)

子ども用チョウ図鑑を出して私のチョウの夢追い人生は

これからゆっくりできると思っていた。そんな矢先、美ノ谷憲久氏から「福田さん、フタスジチョウの図鑑を作しましょう」と声が掛かった。今までは、いつも私から美ノ谷氏に声を掛けることが多かったが、今回初めて美ノ谷氏から声が掛かった。そうだ。まだ、フタスジチョウの研究が残ったままだった。やり残すことはできない。もうやるしかない。美ノ谷氏に全面協力しようと決めた。自費出版も考えたが、お金がかかる。黒白のホシミスジで図鑑を出したのだから、また黒白のフタスジチョウではダメだと思った。それでも聞くだけは聞いてみよう。むし社の編集部に出向いた。「フタスジチョウで図鑑を作ってもらえますか」「そんなにたくさん書くことがあるの?」「ホシミスジ以上にあります」「それなら出しましょう」すんなりとことが進んだ。ホシミスジ図鑑の実績があったからだろうか。OKの理由が分からない。でも、良かった。フタスジチョウ図鑑を出してもらえることが決まった。これでやる気スイッチが入った。

美ノ谷氏と1983年から始めたフタスジチョウ研究はDNA分析の面白さから途中ホシミスジの研究に移行したが、約40年間、細々とフタスジチョウ研究も継続していた。そして、2021年からの3年間はフタスジチョウ図鑑に向けての研究が復活した。40年前と現在の生息環境の比較ができるのが強みとなった。標本はほぼ世界中から集積された。一番のネックは中国山岳地帯の2系統のフタスジチョウである。成虫斑紋だけでは見分けが付かない。そこでベニヒカゲや高山蝶のDNA分析で研究論文を多く出されている中谷貴壽氏に協力を仰ぐことにした。中国山岳地帯に分布する2系統のフタスジチョウのDNAがどのように違っているのか、興味津々であった。私と美ノ谷氏と中谷氏3者の共同研究が始まった。思いのほか時間がかかった。足掛け3年を費やし、成虫斑紋、ゲニタリア、DNA分析の結果をまとめることができた。ようやくバタフライサイエンスの前号(30号)にその成果が発表された。共著論文の作成では、中谷貴壽氏に多くのご協力をいただいた。厚く感謝申し上げる。フタスジチョウ図鑑の屋台骨部分は、その発表論文の内容を受けての記述となる。フタスジチョウ図鑑は2025年の夏までには出したいと思っている。今回の図鑑は美ノ谷・福田で出す予定である。

9. チョウの夢追い人生を続ける (Fig. 9)

ここまで私のチョウの夢追い人生を述べてきた。つくづく思う。それは私にとってチョウの無い人生は考えられないということである。チョウの夢追い人生を楽しく広げられたのは、自分自身がチョウにこだわり続けてきたことが一番であるが、それだけではない。多くの方々の助けがあったからこそ達成できたのである。私の教訓は、人との出会

いを大切に、である。人との出会いが無ければ自分の力が伸びない、である。なので、人との出会いは自分から求めていく、である。

若い頃は世田谷蝶類愛好会、そして世田谷昆虫愛好会、その後、ネプティス研究会、タカオゼミナール、日本鱗翅学会関東支部、日本鱗翅学会、日本蝶類学会、日本蝶類科学学会、グループ多摩虫、教育界では東京都小学校理科教育研究会OB会とかかわり現在に至っている。コロナ禍の2022年10月29日(土)30日(日)、国立オリンピック記念青少年センターで、対面式の日本鱗翅学会第68回大会を大会長として関東支部幹事の皆様と協力し、成功させることができた。このことは私のチョウの夢追い人生にとって大きな節目となった。チョウを通して多くの皆様と楽しく生きてきたこと、チョウ友財産があったればこそ迎えることのできた節目だと思っている。今までに出会った多くのチョウ友などに感謝したい。

小学校教員の最後は校長としてチョウを生かした。自然体験を多く取り入れた学校経営で特色を出した。研究発表会では解剖学者の養老孟司先生を講師にお迎えし、自然体験の重要性を語っていただいた。おかげさまで会場の体育館は満杯になった。養老先生とのエピソードに触れる。ご講演の約束は、研究発表会を迎える2年前に行なった。直接、養老先生のもとへお願いに上がった。養老先生は「生きていたら講演をお引き受けします」といわれた。養老先生との記念に2ショット写真を撮った。養老先生は、「2ショットは標本写真(証拠写真)ですね」といわれた。養老先生は古希を過ぎた頃で私は還暦を迎える2年前頃である。研究発表会当日、3種になったホシミスジ(ホシミスジ・ウラグロホシミスジ・フチグロホシミスジ)の標本を抱えて養老先生との2ショットを校長室で撮った。正に2年前、養老先生がいわれた標本写真(証拠写真)である。だから本誌バタフライサイエンスにもその標本写真を載せることができた。

高校生の頃、チョウで飯は食えないから大学は法科か商科に行きなさいと親や親戚からいわれた。それでも農学部から小学校に就職し、2足の草鞋で教育活動(チョウ好きを育てるを含む)とチョウ研究を行ない、親や親戚が心配するような人生にはならなかった。飯を食うことができたのである。最後になるが、私の飽くなきチョウへの夢追い人生を理解し、今日まで支え続けてくれている妻に厚く感謝したい。さあ、チョウの夢追い人生はこれからも続いていく。美ノ谷氏とフタスジチョウ図鑑を出した後、自分の身体から何が出て来るのだろうか。出てきた夢追いチョウに向かって、今度こそゆっくりと進んでいきたい。

(〒409-0126 山梨県上野原市コモアしおつ1-27-5)